

# 林の底

宮沢賢治

青空文庫



「わたしらの先祖やなんか、

鳥がはじめて、天から降つて来たときは、

どいつもこいつも、みないち様に白でした。」

「黄金の鎌」が西のそらにかゝつて、風もないしづかな晩に、一  
 ぴきのとしよりの梟が、林の中の低い松の枝から、斯う私に話  
 かけました。

ところが私は梟などを、あんまり信用しませんでした。ちよつ  
 と見ると梟は、いつでも頬をふくらせて、滅多にしやべらず、た  
 またま云へば声もどつしりしてますし、眼も話す間にはつきり大  
 きく開いてゐます、又木の陰の青ぐろいとこなどで、尤もらしく

肥ふとった首をまげたりなんかするとこは、いかにもこゝろもまつすぐらしく、誰たれも一ぺんは欺だまされさうです。私はけれども仲々信用しませんでした。しかし又そんな用のない晩に、銀いろの月光を吸ひながら、そんな大きな梟が、どんなことを云ひ出すか、事によるといまの話のもやうでは名高いとんびの染屋のことを私に聞かせようとしてゐるらしいのでした、そんなはなしをよく辻つじ棲つまのあふやうに、ぼろを出さないやうに云へるかどうか、ゆつくり聴いてみることも、決して悪くはないと思ひましたから、私はなるべくまじめな顔で云ひました。

「ふん。鳥が天から降つてきたのかい。

そのときはみんな、足をちぢめて降つて来たらうね。そしてみ

ないちやうに白かったのかい。どうしてそんならいまのやうに、三毛だの赤だの煤すすけたのだの、斯ういろいろになったんだい。」  
梟ははじめ私が返事をしだしたとき、こいつはうまく思ふ壺つぼにはまったぞといふやうに、眼をすばやくぱちつとしましたが、私が三毛と云ひましたら、俄にはかに機嫌きげんを悪くしました。

「そいつは無理でさ。三毛といふのは猫ねこの方です。鳥に三毛なんてありません。」

私もすっかり向ふが思ふ壺にはまったとよろこびました。

「そんなら鳥の中には猫が居なかつたかね。」

すると梟が、少しきまり悪さうにもぢもぢしました。この時だと私は思つたのです。

「どうも私は鳥の中に、猫がはひつてゐるやうに聴いたよ。たしか夜鷹よだかもさう云つたし、鳥からすも云つてゐたやうだよ。」

梟はにが笑ひをしてごまかさうとしました。

「仲々ご交際が広うごわすな。」

私はごまかさせませんでした。

「とにかくほんたうにさうだらうかね。それとも君の友達の、夜鷹がうそを云つたらうか。」

梟は、しばらくもぢもぢしてゐましたが、やっと一言、

「そいつはあだ名でさ。」とぶつ切ら棒に云つて横を向きました。

「おや、あだ名かい。誰の、誰の、え、おい。猫つてのは誰のあだ名だい。」

ふくろふ

梟はもう足を一寸枝からはづして、あげてお月さまにすかし

て見たり、大へんこまったやうでしたが、おしまひ仕方なしにあらん限り変な顔をしながら、

「わたしのでき。」と白状しました。

「さうか、君のあだ名か。君のあだ名を猫ねこといったのかい。ちつとも猫に似てないやな。」

なあにまるつきり猫そっくりなんだと思ひながら、私はつくづく梟の顔を見ました。

梟はいかにもまぶしさうに、眼をぱちぱちして横を向いて居をりましたが、たうとう泣き出しさうになりました。私もすつかりあわてました。下手へたにからかつて、梟に泣かれたんでは、全く気の

毒でしたし、第一折角あんなに機嫌きげんよく、私にはなしかけたものを、ひやかしてやめさせてしまふなんて、あんまり私も心持ちがよくありませんでした。

「じっさい鳥はさまざまだねえ。」

はじめは形や声だけさまざまでも、はねのいろはみんな同じで白かったんだねえ。それがどうして今のやうに、みんな変つてしまつたらう。尤も鷺もつとさぎや鶺鴒こいぶは、今でもからだ中まつ白だけれど、それは変らなかつたのだらうねえ。」

梟は私が斯かう云ふ間に、だんだん顔をこつちへ直して、おしまひごろはもう頭をすこしうごかしてうなづきながら、私の云ふのに調子をとつてゐたのです。

「それはもう立派な訳がございます。

ぜんたいみんなまつ白では、

ずるぶん間ちがひなども多ございました。

たとへばよく雉子きじや山鳥などが、うしろから

『四十雀しじふからさん、こんにちは。』とやりますと、変な顔をしながら

らだまつて振り向くのがひはだったり、小さな鳥どもが木の上  
ゐて、

『ひはさん、いらつしやいよ。』なんて遠くから呼びますのに、

それが頬ほほ白しろで自分よりもひはのことをよく思つてゐると考へて、  
憤おこつてぷいっと横そへ外れたりするのでした。

實際感情を害することもあれば、用事がひどくこんがらかつて、

おしまひはいくら禿鷲はげわしコルドンさまのご裁判でも、解けないやうになるのだつたと申します。」

「いかにも、さうだね、ずるぶん不便だね。でそれからどうなつたの。」

（あゝ、あの櫛ならの木の葉が光つてゆれた。たゞ一枚だけどうしてゆれたらう。）私はまるで別のことを考へながら斯うふくろふに聴きました。ところが梟はよろこんでぼつぼつ話をつゞけました。「そこでもうどの鳥も、なんとか工夫をしなくてはとてもいけない、こんな工合ぐあひぢや鳥の文明は大ていこゝらでとまってしまふと、口に出しては云ひませんでしたが、心の中では身にしみる位さう思ひつゞけてゐたのでございます。」

「うんさうだらう。さうなくちやならないよ。僕らの方でもね、少し話はちがふけれども、語ことばについて似たやうなことがあるよ。で、どうなつたらう。」

「ところが早くも鳥類のこのもやうを見てとんびが染屋を出しました。」

私はやっぱりとんびの染屋のことだつたと思はず笑つてしまひました。それが少うし鼻ふくろふに意外なやうでしたから、急いでそのあとへつけたしました。

「とんびが染屋を出したかねえ。あいつはなるほど手が長くて染ものをつかんで壺つぼに漬つけるには持つて来いだらう。」

「さうです。そしていったいとんびは大へん機敏なやつで勿論もちろん

その染屋だつて全くのそろばん勘定からはじめましたにちがひありません。いつたいとんび鳶は手が長いので鳥を染そめつぼ壺に入れるには大へん都合がようございました。」

あつ、私が染ものといつたのは鳥のからだだつた、あぶないことを云つたもんだ、よくそれで梟が怒り出さなかつたと私はひやひやしました。ところが梟はずんずん話をつゞけました。それといふのもその晩は林の中に風がなくて淵ふちのやうにひそまり西のそらには古びた黄金きんの鎌かまがかかり檜ひのの木や松の木やみなしんとして立つてゐてそれも睡ねむつてゐないものはじつと話を聴いてるやう大へんに梟の機嫌きげんがよかつたからです。

「いや、もう鳥どものよろこびやうと云つたらございません。殊

にも雀すずめややまがらやみそさざい、めじろ、ほゝじろ、ひたき、うぐひすなんといふ、いつまでたつても誰たれにも見まちがはれるてあひなどは、きやつきやつ叫んだり、手をつないだりしてはねまはり、さつそくとんびの染屋へ出掛けて行きました。」

私も全くこいつは面白いと思ひました。

「いや、さうですか。なるほど。さうかねえ。鳥はみんな染めて貰もらひに行つたかねえ。」

「えゝ、行きましたとも。鷺わしや駝だてう鳥など大きな方も、みんなのし出掛けました。」

『わしはね、ごくあつさりとやつて貰ひたいぢや。』とか、

『とにかくね、あんまり悪どい色でなく、まあせいぜい鼠ねずみいろぐ

らゐで、ごく手ぎはよくやって呉れ』とかいろいろ注文がちがつて居ました。鳶ははじめは自分も油が乗ってましたから、頼まれたのはもう片っぱしから、どんどんどんどん染めました。

川岸の赤土の崖がけの下の粘土を、五とこ円くほりまして、その中に染料をとかし込み、たのまれた鳥をしつかりくはへて、おほまた大股おほまたに足をひらき、その中にとつぷりと漬けるのでした。どうもいちばん染めにくく、また見てゐてもつらさうなのは、頭と顔を染めることでした。頭はどうか逆さかまにして染めるのでしたが、顔を染めるときはくちばしを水の中に入れるのでしたから、どの鳥もよつぽど苦しいやうでした。

うっかかり息を吸ひ込まうもんなら、胃から腸からすっかかりまっ

黒になったり、まっ赤になったりするのでしたから、それはそれは気をつけて、顔を入れる前には深呼吸のときのやうに、息をいっぱいに吸ひ込んで、染まったあとではもうとても胸いっぱいにたまった悪い瓦斯ガスをはき出すといふあんばいだったさうです。それでも小さい鳥は、肺もちひさく、永くこらへて居れませんでしたから、あわてて死にさうな声を出して顔をあげたもんだと申します。こんなのはもちろん顔が染まりません。たとへばめじろは眼のまはりほほが染まらず、頬ほほじろは両方の頬が染まって居りません。

「私はこゝらで一つ野次やじつてやらうと思ひました。

「ほう、さうだらうか。さうだらうか。さうだらうか。さうだらうかねえ。私は

めじろや頬じろは、自分からたのんであの白いところは染めなかつたのだらうと思ふよ。」

ふくろふ  
梟は少しあわてましたが、ちよつとうしろの林の奥の、くらいところをすかして見てから言ひました。

「いゝえ、そいつはお考へちがひです。たしかに肺の小さなためです。」

こゝだと私は思ひました。

「さうするとどうしてあんなにめじろも頬白も、きちんと両方おんなじ形で、おんなじ場所に白いかたが残つてゐるだらうね。あんまり工合ぐあひがよすぎるよ。息がつゝかないでやめたもんなら、片方は眼のまはり、あとはひたひの上とかいふ工合に行きさうな

もんだねえ。」

梶はしばらく眼をつむりました。月光は鉛のやうに重くまた青かつたのです。それからやつと眼をあいて、少し声を低くして云ひました。

「多分両方べつべつに染めましたでせう。」

私は笑ひました。

なほさら

「両方別々なら尚更なほさらをかしいぢやないかねえ。」

梶はもうけろつと澄まして答へました。

「をかしいことはありません。肺の大きさははじめもあとと同じですから、丁度同じころに息が切れるのです。」

「ふん、さうだらう。」私は理くつは尤もっともだ、うまく畜生に遁げた

など心のうちで思ひました。

「こんな工合で。」梶は云ひかけてぴたつとやめました。どうも私にいまやられたのが、しやくにさはってあともう言ひたくないやうでした。すると今度は又私が、梶にすまないやうな気になりました。そこで言ひました。

「そんな工合でだんだんやつて行つたんだねえ。そして鶴つるだの鷺さぎだのは、結局染めなかつたんだねえ。」

「いゝえ。鶴のはちゃんと注文で、自分の好みの注文で、しつぽのはじだけほつちより黒く染めて呉れと云ふのです。そしてその通り染めました。」

梶はにやにや笑ひました。私は、さつきひとの云つたことを、

うまく使ひやがったなどは思ひましたが、元来それは鼻をよろこばせようと思つて云つたことですから、私もだまつてうなづきましました。

「ところがとんびはだんだんいゝ気になりました。金もできたし、  
気ぐらゐもひどく高くなつて来て、おれこそ鳥の仲間では第一等  
の功労者といふやうな顔をして、なかなか仕事もしくなりました。  
尤も自分<sup>もつと</sup>は青と黄いろで、とても立派な縞<sup>しま</sup>に染めて大威張り  
でした。

それでもいやいや日に二つ三つはやってましたが、そのやり方  
もごく大ざっぱになつて来て、茶いろと白と黒とで、<sup>こまか</sup>細いぶちぶ  
ちにして呉れと頼んでも、黒は抜いてしまつたり、赤と黒とで縞

にして呉れと頼んでも、燕つばめのやうにごく雑作なく染めてしまった  
り、實際なまけ出したのでした。尤もそのときは残ったものもわ  
づかでした。鳥からすと鷺さぎとはくてうとこの三疋びきだけだったのです。

鳥は毎日でかけて行つて、今日こそ染めて貰もらひたい今日こそ染  
めて貰もらひたいとしきりにうるさくせつきました。

明日にしるよ、明日にしるよ、と鳶とんびがいつでも云ひました。そ  
れがいつまでも延びるのです。

鳥が怒つて、たうとうある日、本気に談判をしたのです。

『一体どう云ふ考だ。染屋と看板がかけてあるからやつて来る  
んだ。染屋をよすならきちんとやめてしまふがいゝ。何日たつて  
も明日来い明日来いぢやもう承知ができない。染めるんならもう

きつと今すぐやって呉れ。どっちもいやならおれも覚悟があるから。』

鳶はその日も眼を据ゑて朝から油を呑んでゐましたが斯う開き直られては少し考へました。染屋をやめても、金には少しも困らんが、たゞその名前がいたましい。やめたくもない。けれどもいまごろから稼かせぎたくもないしと考へながらとにかく斯う云ひました。

『ふん、さうだな。一体どう云ふふうに染めてほしいのだ。』  
鳥は少し怒りをしづめました。

『黒と紫で大きなぶちぶちにしてお呉れ。友禅模様のごくいきな  
のにしてお呉れ。』

とんびがぐつとしやくにさはりました。そしてすぐ立ちあがって云ひました。

『よし、染めてやろう。よく息を吸ひな。』

鳥もよろこんで立ちあがり、胸をはって深く深く息を吸ひました。

『さあいゝか。眼をつぶつて。』とんびはしつかり鳥をくはへて、  
墨すみつぼ壺の中にぎぶんと入れました。からだ一ぱい入れました。鳥はこれでは紫のぶちができないと思つてばたばたばたしました。たがとんびは決してはなしませんでした。そこで鳥は泣きました。泣いてわめいてやつとのことで壺からあがりはしましたがもうそのときはまっ黒です。鳥は怒つてまっくろのまま染物小屋をとび

出して、仲間の鳥のところをかけまはり、とんびのひどいことを云ひつけました。ところがそのころは鳥も大ていはとんびをしやくにさはってましたから、みな一ぺんにやって来て、今度はとんびを墨つぼに漬つけました。鳶はあんまり永くつけられたのでたうとう気絶をしたのです。鳥どもは気絶のとんびを墨のつぼから引きあげて、どつと笑ってそれから染物屋の看板をくしゃくしゃに砕いて引き揚げました。

とんびはあとでやつとのことで、息はふき返しましたが、もうからだ中まつ黒でした。

そして鷺さぎとはくてうは、染めないまゝで残りまりました。」  
梟ふくろふは話してしまって、しんと向ふのお月さまをふり向きしました。

「さうかねえ、それでよくわかったよ。さうして見ると、おまへなんかはまあ割合に早く染めて貰<sup>もら</sup>つてよかつたねえ、なかなか細<sup>こまか</sup>く染まつてゐるし。」

私は斯<sup>か</sup>う言ひながらもう立ちあがりその水銀いろの重い月光と、黒い木立のかげの中を、ふくろふとわかれて帰りました。

# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 林の底

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>